

夢なんて何もない。クズだった学生時代。

こんにちは。ゆきです。

今でこそ、すごい人だって言ってもらえることが増えたけど、

これを読んでくれている人は、私が就職をしたくなくて逃げてばかりだったことを知っていると思います。

このレポートでは、

当時の私の悩みや葛藤をより書いてみました。

クズからでも立ち上がれるんだと

感じてもらえれば幸いです。

夢は何？

いやというほど聞かれてきた。

小学生のころから
もう、
何回聞かれたたろう。

人前では「大学教授」なんて言ってみたりして。
たしかに宇宙のことは幼稚園児の年ごろから好きだった。
なにかで見た、宇宙のキラキラした写真が好きだった。

でも、そんなにやりたい？

本当は仕事なんてしたくなかった。

聞こえのいいことを言っていたら、
周りはすごいね、とってくれるから。
本当は何がしたいのかなんて聞いてこないから。

青森県の田舎に生まれて
小学校の目の前には田んぼがある。
そんな幼少期でした。

2、3歳のころは、近所の幼馴染たちと一緒に遊んで
けっこう楽しかったんです。

私の両親は共働きで、
ひいおじいちゃんのころからやっていた酒屋をやっていた。

後にコンビニをやることになるんだけど、
そのころから両親の帰りがすごく遅くなっていた。

スタッフを育てるために研修したり、
商品の発注をかけたり、
時には足りないスタッフの代役で店頭に出たり。

いろいろな役割をやっていて
仕事の時間が増えて、
会えるのは朝7時台か、夜の10時以降とか。

酒屋のころはよかったのに。
自宅の1階でお店をやっていて、2階にリビングとかが
ある。

両親はそのころからよく働いていたけど
1階に行けばいつでも会えたから寂しくなかった。

でもコンビニをやるようになって変わってしまった。

自宅には駐車場をつくるスペースがなくて
車で10～15分のところに店舗をかまえた。
今までみたいに気軽に顔を見られる場所からいなくなっ
てしまったのだった。

まだ小学生にもなっていない私にとって、
両親に会えないのはつらくて寂しかった。

最初のころはあまりにも寂しくて、
ひとり家で泣いていた。

何時間泣いたって
両親は仕事が終わるまで帰ってこれないのに。

当時は
自分がつらいとか、寂しいとか

認めることがイヤで、学校の先生に「ご両親帰ってこなくて寂しいんだね。」って言われても、そんなことないって言い張っていた。

でも実際は寂しさをこじらせていて、なんでそんなに働かなきゃいけないの。
って思ってた。

どうしても

仕事に対していいイメージを持てなかった。

特に私に影響をあたえたのは父親。

すごくまじめで儉約家。

しっかり学校に通えたのは父親のおかげだった。

でも子供のころは感謝なんて少しも感じられなかった。

家で顔を合わせることはないし、

朝早く家を出て、日付が変わるころに帰ってきていたと

思っていたら

仕事が終わらない、と、さらに帰る時間が遅くなってい

く。

だんだん帰る時間が深夜になり

仕事に出るのが昼近くになって

気が付いたら早朝帰ってきて、
夜に仕事へ向かっていた。

完全に昼夜逆転。

しかも休みがない。
365日働いている。
研修で県外へ行っても、
日帰りで帰って夜仕事へ。
日中、法事があったとしても
夜は仕事へ。
少なくとも10年、
1日も休んでいなかったと思う。

もし自分だったら、と思うと
想像するだけでも耐えられません。

どう考えたって無理がある。

365日 仕事してるか寝てるかを10年。

父はやっていたけど、日々無理がたたっていた。

顔を合わせればいつも、はぁ、とため息をついて

「腰がいたい。」

「肩が痛い。」

「疲れた。」

「自分は大変なんだ。」

「頑張っているんだ。」

毎日、疲れの限界にいるように見えた。

正直、そんなにつらいならやめればいいのかって思った。

育ててもらっている身なのに、
言っではいけないことだったかもしれない。

でもおかしい。

父も知っている人で、
同じくコンビニを経営している夫婦。
5軒ほど経営しているというけど
週に1日、2日は休みを取っているらしい。

うちがやっているのは2軒。

その人たちの半分以下、

なのになんで休みがとれないの？

ずっとそう思っていた。

父はまじめすぎたんです。

人に任せることができない人だった。

自分が思ったことを

自分が思った順番でこなさないため。

ちょっとでもズレてしまうと違うといいます。

結局、自分がやったほうが早いといって

あれもこれもと背負い込む。

もっと人に任せればいいのに。

どこか遠い存在のひととかじゃない、

父自身が知っている人で、仕事を人に任せて
事業がまわっている人がいるのに。

そこから学ばない。

父は一生懸命働いているという。

でも子どもの私から見れば

一生懸命働いているというよりも、

自分は、人に任せず背負う人間なんだ。

っていうのを、一生懸命保つために

仕事をしているようだった。

それで自分が疲れてしまって
周りにネガティブな空気をふりまいているとしても。

さらに私の心を刺したのは
父の口癖。

「うちはお金がないから。」

その日のお金に困るほど、貧乏だったわけじゃない。
でも、商売をやっていたからでた言葉。

1か月後に設備投資で500万円必要だ。

なんてことが平気で起こる。

お金があるもんだと思って使っていたら、必要なときに
なくなってしまう。

父の考えはこういうこと。

考え方は正しいと思う。

けれど、ことあるごとに「うちはお金がない。」

と言われると

お金を使うことはすべて悪いことのように思えてくる。

父はよく言っていた。

このクリスマスケーキは3000円したから大事に食べて。

こっちのオードブルいくらしたと思う？ けっこう高いんだよ。

おせち、1万円したんだ。味わって食べてね。

どんなものでもタダではない。

働いて、お金を稼いできたから食べられるんだ。

そんな思いだったらしい。

けど、、、、

なに食べてもおいしくなんてなかった。

あまりにもお金がないといわれて
お金がかかることは悪いことだ、という頭になっていた
し

もう味なんてしなかったんじゃないかと思う。

わざわざ値段をいうのなら買ってこなければいいのに。
恩着せがましい。

そのくせ、食べないと食べないで
「せっかく買ってきたんだから。こっちを食べてよ。」
といやそうな顔をする。

どうやら買ってこないという選択肢はないらしい。

これは高いたの、なんだの言われて
食べる気失せてるのに。

子供のころの私にとって、社会人といえば親ぐらい。
疲れた、疲れたといいながら
毎日働いていても「お金がない。」

大人ってみんなこうなのかな。
仕事って何十年もやらなきゃいけないのに
まるで仕事の奴隷。

自分もそうなるのかな。

一生、仕事にとらわれて生きていくのなら
何のために生まれてきたんだろう。

仕事をすることに希望なんてなかった。

私はゲームに逃げた。

現実なんて考えず、ゲームをやりこんでいた。

とにかく

逃げて

逃げて

考えることを放棄して

逃げた。

当時、はやっていたポケモンをやりこんでは、
700時間くらい費やしてみました。

それだけじゃなくて、
有名どころのRPG

ドラクエやら、FFやら、テイルズやら、
1回クリアしてからも、
何度も何度も攻略してみたり。

、、、しょーもない。

今思えば、もっと違うことに時間使えたのに。
暇だけはあったんだから。

しょーもないことに永遠と時間をさいていた。

夢なんてない。

やりたいことって何？

将来どうするんだろうって
ときどき不安がおそってくるけど、
やっぱり考えることを放棄した。

どうやったら

少しでも逃げていられるんだらうって考えて

勉強やっとならばいいんじゃないかと思った。

成績良ければ、すごいねってほめてくる。

将来は有望だねって周りが勝手にちやほやする。

あーだこーだと介入してくることはない。

幸い、いい点数をとることは得意だったから、

こうやってこうすれば点数出るでしょ

って方法を考えて高得点とっていた。

おかげで進学校にはいり、
私はまだ逃げルートを歩むことになる。

父は高校卒業したら、
どこかに就職してほしいと考えていた。

社会経験をつんで、
コンビニを継いでほしいと。

こっちからしてみればお断り。

ぜったいイヤ。

なんで死にものぐるいで働いてもお金ない、
そんな仕事やらなきゃいけないの。

って感じだった。

とにかく実家を継ぐだけは無理。と思っていた。

いや、それだけじゃない。

サラリーマンもさらさらやる気がなかった。

私にとってサラリーマンといえばテレビの向こうの存在。

よく街頭インタビューで

酔っばらいの新橋のサラリーマンが映る。

学生のころの私からすれば

30代、40代の人だっておじさんにみえる。

大人に見えるその人たちは

月の小遣いが2万円とか、3万円しかないといってる。

会社の上司がうるさいだとか、
残業がきついだとか、
給料上げろだとか、
夫婦関係は冷めきってるだとか、

大人ってこういうことなのか、って思った。

朝から満員電車ですし詰めにされて、
たいして高くもない給料で、
一日10時間も、12時間も働いて、

こんな道しかないの？

ただただご飯を食べるために働いて一生が終わる。
やっぱりなんのために生まれてきたのかわからない。

そう思った。

高校生になった私の思いはひとつ。

とにかく仕事をしたくない、
とにかく就職を先延ばしにしたい、
それしかなかった。

高校の入学式にいったとき、
「うちには99%の生徒が進学します。」
といわれ、

これだ！と思った。

高校で3年、大学に進学さえすればさらに4年も就職し
なくていい！
こんなにいいことはない。

そう確信して、
親に大学進学したいと告げた。

高校卒業したら働いてもらおうと考えていた
親からすれば、寝耳に水だ。

高校をでたら実家を継いでほしい、
と言われたけど無視。
完全に無視。

仕事の奴隷になるなんて
ぜったいにごめんだ。

父親は納得していない様子だったけれど。

幸か不幸か、
私はテストで点数とることが得意だった。

周りが家で2時間、3時間と勉強している中、
私は1時間程度で終わらせられるようにしていた。

表向きはすごいことだけど、
すべては
いい成績を出して、就職を延期させるため。

なんなら
大学進学しないともったいない
とまわりに言わせるためだった。

そして私の思惑は成功する。

高校2年生になったころ、先生から
志望校を東大にしてみてもどうか。
と言われた。

え？、、、、、、、、

私があまりにきょとんとするから
先生が続けた。

目標は高いほうがいいからな。

え、、、、、、！！？

さすがに東大って。

受かるわけないしなあ。

と思ったのもつかの間。

これはチャンスだと思った。

父親をだまらせることができる。

東大を目指せるくらいの成績の人間に

就職しろという親はまずいない。

やっぱり、さすがの父も納得せざるをえなかった。

はたから見たら、
すごく羨ましいといわれたりする。

公立高校いって
塾も通わず
東大目指すなんて
親孝行だね。

そんなふうに褒められたこともあったっけ。

けど私が思っていたのはこれだけ。

「よしっ、これで就職を延期できる。」

、、、しょーもない子供でした。

クズです。

テレビで大家族ものの番組見てて、
長男長女が、親の力になりたいって
早くから仕事をしている様子を見て

すごいなー、ぜったいマネできない。
って思うだけだった。
他人事でしかない。

親を助けたいとか思ったことなかった。

けっきょく大学受験では東大に落ち、
東北大学に入った。

東大目指したらいいよ
って先生には言われていたけど、
正直、そこまでのモチベーション全然なかった。

就職を延期するために大学行くのに
そんなに頑張る気にはなれず、そして落ちた。

でも浪人しようとか思わなかった。

東大に入りたいたいのではなく、

四大に入れればどこでもよかったから。

親元を出られればなんでもよかったから。

でも、少しだけ希望を抱いてみたりした。

今までは田舎にいて

遊ぶといってもカラオケぐらい。

学生じゃ車も運転できない。

親がどこか旅行に連れて行ってくれるなんてこともない。

すごい狭い世界で生きていた。

当時の私にとって仙台は十分すぎる都会。

都会に来たら、何かが変わるんじゃないかと思っていた。

たしかに大学生になって少しだけ生活はよくなった。

部屋は狭いけど
父に会わなくていい。

疲れただけの、

ここが痛いだの、

自分は大変だの、

お金がないだの、

聞きたくもない

ため息交じりの言葉を聞かなくて済む。

それだけでも私にとっては大きいことだった。

でも、私自身はなにも変わらなかった。

やりたいことも見つからず、
なんとなくバイトして、
なんとなくサークル行って、
ゲームして、

大学では、高校の時より勉強しなくていいから、
単位さえ取ればいいって思っていた私からしたら暇が
多い。

とりあえず日々を適当にこなして、
暇な時間は寝て過ごしていた。

暇すぎて

めちゃくちゃ手の込んだ

サバの味噌煮をつくったこともある。

わたしの地元は、過去

サバの水揚げ量が全国でもトップクラスに多かった。

小中学校の給食で、

サバの味噌煮が出ることがあって

それがもう、とにかくおいしい。

ハンパない。

缶詰で食べたりすることもあるけど、

あの給食のサバの味噌煮には敵わない。

再現してみよう！

ってことで

サバの切り身を買い、
1本1本すべての骨を取り除いて

味噌、醤油、酒、みりん、砂糖
とか使ってちょっとずつ調整して

まさにあの味になった！

いやー、感動しました。

でも
1品つくるのに2時間はかかったと思う。

時間かかりすぎて、
もう、缶詰のサバの味噌煮でよくない？
って感じ。

そんな中で1つの出会いがある。

フリーランスでヘアメイクをやっている人に出会った。

その人、Aさんは学生を終えて

すぐに

フリーランスとして働き始めたという。

フリーランス？

なんとなくでしか知らなかった私。

なんでも、会社に所属しないで自分で仕事をとってくるものらしい。

この程度の認識でした。

Aさんも、四大に通ってから

フリーランスの道にいったようで、

話を聞くうち

なんか、私でもできるんじゃないか。

そんな気持ちが芽生えました。

四大に通っていたことや

実家が自営業だったこと、

興味があった美容っていうジャンル、

なんとなく共通点が多いなと感じて、

この人が学生終えてすぐにフリーランスになったのなら

私もできるんじゃないか、って思えました。

実は美容って昔から好きで、

母親はむかし美容部員をやっていたり、

姉は、中学生のころからメイクさんになる！

と宣言していた。

私も高校生のあたりからメイクとかネイルに目覚めて、週末、友達と遊ぶときにおしゃれしてたりした。

うん。

なんかできそう。

具体的にどんなことをしていったらいいかはこの人からも聞ける。

20年以上、仕事をする事から逃げてきた私がなんとなくだけど方向性を決めて、

美容の仕事をするには美容師免許が必要だということで美容学校に通うことにした。

でもここからが大変。

そりゃもう、大変。

学校に通うっていても自力で通えるわけじゃない。

そんな根性もない。

父に許しをもらって

通わせてもらえるようにしなくてはいけない。

わざわざ東北大学にまで入って、

有名企業への就職とかできるのに、

美容学校へ通わせてほしい。

と言わなくてはいけない。

覚悟していたことではありますが、

いろいろと言われました。

初めて、美容学校に行きたいと聞いた父親は
話にならないといった様子で、

何を考えているんだ。
お前には芯がない。

イヤなことから逃げて、逃げて、
何を言い出すかと思えば、
まだ学校に行く？

いつまで学生を続けるつもりだ。と。

自分だって、仕事がいやだって思うことはある。
それでも一生懸命やっているのに。

それだけじゃない。

姉も実家の仕事を手伝っていた。

姉はメイクさんになりたいと、

高校卒業してからメイクの専門学校に入り勉強してた。

でも実家のコンビニで人手が少ない、と

卒業後、実家に戻ってきていたのだった。

すでに6年たっていた。

私が学生を終えるまではぜったいに

経営を傾けるわけにはいかない。

仕事ができる姉は、
実家の経営を続けていくのに欠かせず、

私の卒業までは
自分のやりたいことができない状態だった。

その姉の時間をさらに2年も奪ってまでやるのか。

そう父に言われて
さすがに胸が痛かった。

けど、譲れなかった。

一生やりたくない仕事に追われて過ごすのは
いやだった。

どうしても。

どこまでも、どうしようもない。

何度も話した。

何度話したかわからない。

今度こそは

将来につなげるための日々にするつもりだからと。

なんとか許しをもらった。

父からも。姉からも。

自分の思いを譲ってもらって。

なにやってるんだろう。

自分はサイテーなやつだ、と思いながら、
今度こそちゃんとしようと決めた。

美容学校はしっかり通い、
途中からサロンでも働き始め

学校と仕事を両立させながら、
2年間でほとんど無遅刻無欠席で過ごした。

卒業してからは
フリーランスのヘアメイクとしての
仕事につなげるため、

銀座でホステスもするようになった。

あまり公言していないが、
数学の仕事をしていたこともある。

ベネッセに、河合塾や東進からも仕事を受けて

模擬試験の採点をしたり、
受験対策講座の添削をしていた。

わかりやすく言うと、赤ペン先生のような仕事だ。

大学に通わせてもらっていたことが
まったくの無意味なことにならないように。

せめてもの罪滅ぼしになれば、と。

(おわり)

いかがだったでしょうか。

仕事をする事、就職することに対する
葛藤をかきました。

こののち銀座でチーママとなり、
同時にヘアメイクの仕事も獲得するのですが、

2020年のコロナの大流行によって、
2度目の挫折を味わうことになります。

生活を立てなおすため、
ビジネスの道を歩むようになる。

その話はまた別の機会に。

ゆきでした。